

ギリシア・ミノア文明における宮殿の諸相

—中庭の長短比率の分析を通して—

Phases of Palaces in Minoan Crete Through Analysis of Central Court Length-to-Width Ratios

小山 琢

Koyama Taku

摘要

The definition of “palace” is one of the most controversial topics in the studies of Minoan Crete, although the importance of palaces is well known. Recent works have tended to focus only on palaces that have sufficient elements – size, architectural forms – to be worthy of the name. However, this approach cannot grasp the wider scheme of Minoan architecture that includes both palatial and buildings.

An analysis of the central courts of both palaces and nonpalatial buildings presupposes that the results will provide valuable information in re-evaluating the definition of “palace”. Specifically, a comparison of length-to-width ratios, which are known to be roughly 1:2 in major palaces, showed that (1) most of the courtyards were constructed in the ratio of 1:2 and (2) this date did not reflect the conventional framework of palaces or nonpalatial buildings.

These results clarify the necessity of re-examining the term “palace”. The central architectures of the Minoan civilization were more flexible and diverse than we recognize and enclose many functions among them that are merely defined by the term “palace”. It is considered that the fundamental cause of this diverse development was the social demand for the building specific to the area of construction.

キーワード：ミノア文明 宮殿 非宮殿建造物 宮殿的 中庭 長短比率

Keyword: Minoan, palace, non-palatial building, palatial, central court, length-to-width ratios.

はじめに

ギリシア青銅器時代のミノア文明では、宮殿と呼称される建造物が聖俗の中心として機能していた。ミノア文明の時代区分は表1の通りだが、主な宮殿は早期ミノア(EM期)の終盤から既に登場し、地域のエリート集団が儀礼と行政を通じて周辺地域を支配していた場所と考えられる。中期ミノア(MM)II-III期には地震発生に伴う崩壊の後に宮殿が再建されるが、以降の新宮殿期時代に宮殿の中心性はさらに強化される¹⁾。

このような歴史像において重要な位置を占めるのが、「宮殿」という用語の定義である。クノッソス遺跡の発掘を行いミノア文明研究の嚆矢となった A. エヴァンズ(Evans)が、発掘で出土した建造物に対して“palace”という用語を冠して以来、ミノア文明におけるセンター的建造物には伝統的にこの名称が用いられている²。支配者が居住し、地域の儀礼、行政、経済の中心であった宮殿の存在は、幾らかの議論が行われながらも自明の前提として捉えられてきた³。

それでは、宮殿の定義は何をもって定まるのか。一般的に宮殿の定義は現存する後期青銅器時代の建造物そのものに依拠し、そこに機能面の解釈が結びつく傾向にある⁴。実際に例示される宮殿的構造としては、貯蔵庫、庭、生産施設、儀礼施設、行政施設等を挙げることが出来る⁵。その中でも、特に重要性が認識されている構造が中庭である。中庭は儀礼に用いられたと考えられており、構造的にだけでなく機能的にも宮殿の中核を担う構造であることが推測されている⁶。中庭の有無がその建造物を宮殿と呼べるか否かという判断の重要事項の一つであることは、研究者の間でも見解が一致するところである⁷。

しかし 1990 年代以降、発掘調査による新遺跡の発見や研究の進展によって、従来の歴史観と宮殿の定義に対する批判が本格化する。例えば、考古学的分析や粘土板史料の研究は、従来想定されていた程に宮殿が経済のイニシアティブをとっていなかった可能性を指摘している⁸。そして、これまで確認されてきた宮殿的特徴を有しながらも、建造物全体の規模などの観点で前例に劣る、或いは壁面の建築技法など一部の宮殿的特徴を有していない建造物の発見は、これらを「宮殿」というカテゴリーに入れることが可能なかという問いに始まり、宮殿自体の再定義を研究者に要請するに至った⁹。

とはいえ、宮殿における中庭の評価は現在も変わらない。しかし、ここで注目すべきことは従来の宮殿の定義から外れる建造物の中にも中庭を有するものが存在する点である。果たして、これらの中庭は宮殿のそれと同質の存在だったのだろうか。そもそもこの定義や区分は適切なのだろうか。中庭の共通点はクノッソス、フェストス、マリアといった主要な宮殿間でこそ既に指摘されているものの、ミノア文明の建造物全体の観点から中庭を論じた例は確認されていない。

宮殿編年	土器編年	炭素絶対年代(Manning, 2010)
前宮殿	EM IA	3100-3000/2900
	EM IB	2900-2650
	EM IIA	2650-2450/00
	EM IIB	2450/00-2200
	EM III	2200-2100/2050
	MM IA	2100/2050-1925/00
古宮殿	MM IB	1925/00-1875/50
	MM II	1875/50-1750/00
新宮殿	MM IIIA	1750/00-1700/1675
	LM IA	1700/1675-1625/00
	LM IB	1625/00-1470/60
後宮殿	LM II	1470/60-1420/10
	LM IIIA1	1420/10-1390/70
	LM IIIA2	1390/70-1330/15
	LM IIIB	1330/15-1200/1190
	LM IIIC	1200/1190-1075/50

表 1: ミノア文明における時代区分。(Manning, 2010) 23; (周藤, 澤田, 2004) 24 から作成。

以上の状況を踏まえ、本稿ではミノア文明における中庭の規格について分析を行い、そこから宮殿の中庭とそれ以外の建造物の中庭は異なる存在なのか検討する。そしてミノア文明における建造物類型を見直す一助としたい。

先行研究



図1: クノッソス宮殿平面図。(McEnroe, 2010) fig.7. 2.を再トレース及び一部改変。

従来の研究ではミノア文明には宮殿を中心とした歴史観が想定されていた。エヴァンズによるクノッソス遺跡の発掘の成果は彼の詳細な報告書である *Palace of Minos* によって知られることとなったが、この報告書のタイトルに記されるように、彼は発掘された大型建造物を「宮殿」と解釈した¹⁰。以来宮殿は、一般的に政治性、宗教性、経済性を始めとした公共機能や居

住機能、そして強力な中心性を備える建造物として研究者の間で想定され続けてきた¹¹。

宮殿に共通して備わる基本的な構造として指摘されるものは、①中庭やその他の建物周辺の庭、主に西翼部に配置される貯蔵庫、儀礼用の部屋、行政用の部屋、主に東翼部に配置される居住地、工房などの構造、②切石など一般的家屋には用いられない技法、或いは③線文字 A の粘土板を始めとした行政文書などである¹²。宮殿の基本構造としては図 1 のクノッソス平面図を参照されたい。ただしこれらの定義は最大規模の宮殿を持つクノッソスやそれに準ずるフェストス、マリア、ザクロスの事例を基にしていると言わざるを得ない。そして近年、権力が集中した宮殿像を基盤に構築された歴史観と、主要遺跡の共通構造に基づく宮殿の定義には研究の進展と共に課題が浮かび上がってきている。

宮殿の中心性に対する修正の例としてはクレタ島中央南部のメサラ平野地域における研究を挙げることが出来よう。大規模な宮殿を持つフェストス遺跡及び周辺遺跡を擁するメサラ平野の経済は、従来フェストスの宮殿によって支配されていたと解釈されてきたが、線文字 A が記された粘土板の解説や印章の研究により、この宮殿の経済的機能は想定よりも低く、むしろ隣接するアギア・トリアダがこれを担っていた可能性が指摘された¹³。また宮殿的様式を持つカマレス土器の生産地も従来は宮殿内の工房で生産されていたと考えられていたことに対して、宮殿が想定されていたよりも中心的でなかった可能性が確認されている¹⁴。つまり、これまで社会の中核として捉えられてきた宮殿が実はそれほど中心的に機能していなかった可能性が明らかになったのである。

宮殿の社会的位置付けが修正され始めるのと同時期に宮殿の定義に関わる研究も新たな局面を迎える。1990 年代から 2000 年代にかけて、「宮殿」という建造物の解釈に対し根本的な問題提起がなされ始めた。「宮殿」という用語の中には、「王権」などの含意があり、これらの含意がミノア文明の実態を大きく歪めている事に対して批判がなされたのである¹⁵。これは 20 世紀後半以降の研究調査と、それに伴うデータが蓄積されるにつれて、伝統的な解釈が耐えられなくなり始めた事を示唆している。従来の宮殿というカテゴリーでは捉えられない建造物が発見され、宮殿の定義の再確認や、より適切な建造物の呼称の設定等が試みられた。現状、宮殿の定義に際しては機能、質、社会的重要性よりも、規模や建築構造といった形態の重要性を指摘するもの¹⁶、機能や属性を含まないような中立的な別名称の模索¹⁷、これらの機能を見捨てた形態的呼称は建造物の本質を捉えていないと批判するもの¹⁸等と百家争鳴の観があるが、いずれにせよ従来の定義が宮殿を含めたミノア建造物の多様な展開に対応できていないことは確かである。

2010 年代以降の研究状況においても、用語や定義の問題は決着を見ていない。近年の研究としてはショー(Shaw)の *Elite Minoan Architecture* やパリブー(Palyvou)の *Daidalos at Work* を挙げることが出来る¹⁹。ただし両者の研究とも考察の対象を、宮殿的要素を多く保持した、宮殿の定義に当てはまるものに限定している。つまり複雑多様な特徴を持つ建造物に対して、現状は確

実に宮殿と呼称できるボーダーラインを定めた上で、そこに則り議論をすることが限界となっている。これらの議論は「宮殿と非宮殿建造物の間には明確な差異が存在する」、「宮殿は宮殿的諸要素をまとめて保持するように設計された」という前提に則るものであるが、果たしてその前提は十分に検証されてきたものであろうか。この議論の為には両者に共通する建築構造、建築技法の差異を詳細に検討していく必要がある。しかし、現在の諸検討は宮殿的要素の有無、及び要素保有の度合いでのみ両者の区分を行っている。これでは部分的に宮殿的要素を保持する建造物を議論から取りこぼしてしまう。そのような建造物全体の比較ではなく、部分での比較ならば、宮殿と非宮殿建造物の両者をフラットな目線から検討することが出来ないだろうか。

以上を受けて本稿では、宮殿の定義及び宮殿と非宮殿建造物の境界線が不明瞭であるという問題点に対し、「宮殿的」とされる構造を軸に双方を比較検討し、その間に明確な差異が存在したのか確認することで問題の解決を図る。

宮殿と中庭

前節では研究背景とその問題点、そしてそれに対する本稿での研究方策について述べた。これを踏まえ、本節では具体的な分析対象について記していく。結論から述べると、本稿では宮殿的構造とされるものの内、中庭を取り上げ分析していく。なぜ中庭を分析対象に選定するのか。それは構造、機能の両面において中庭の存在が宮殿の核となっているからである。

構造の観点における中庭の重要性は宮殿の平面図を見れば一目瞭然であろう。ミノア文明における宮殿の構造の特徴は、後代のミケーネの宮殿や、或いはエジプトや近東等の周辺地域の建造物等と比較して述べられることが多い。これらの比較が行われる際には主に建造物内のアクセスルートが話題になる。つまり、その他の宮殿がルートの終着点として王等の支配者の間を設定している事に対して、ミノア文明の宮殿では中庭に導かれる造りになっていることが注目される訳である²⁰。

中庭が構造的に意識される理由はおそらく機能的な重要性和大きく関係している。中庭や、宮殿外部に備わる庭は主に儀礼に用いられたと考えられているが、中庭とその他の庭では行われた儀礼、或いはその構成員に差異があった可能性が図像研究から指摘されている²¹。なぜ中庭で行われる儀礼が重要と考えることができるのか。それは、誰もが入ることが出来るわけではない宮殿の中で行われる儀礼行為は、その社会の階層や構造に大きく関わる可能性を持つからである。その意味において中庭で行われる儀礼の重要性は際立つ。では儀礼が行われた中庭には設計に際して何か特別な意識が向けられていたのだろうか。

中庭の規格や比率について中庭の比率について初めて言及したのはグラハム(Graham)である。彼はクノッソス、フェストス、マリアの宮殿を比較する中で、中庭の比率が大まかに 1:2 で統一されている事を主張している。しかしこれは精密な分析を求めたものではなく、またその理

由についても言及していない²²。

中庭比率が凡そ 1:2 をとる理由の解明に取り組んだ研究の一例にプレジオン(Preziosi)のものを挙げることが出来る。彼はグラハムが確認した 1:2 の比率について独自の理論からその原因を導き出そうとした。彼はミノア建造物では正方形のユニットが利用されているという仮説を提示し、それを基に格子の集合で建造物を捉える試みを行った。そして中庭が 1:2 の比率で構成される事の理由として、西側の儀礼用区画と合わせて一つの正方形を構成するという仮説を打ち出した²³。しかし、彼の研究手法は精度の観点から批判がなされている²⁴。また後のパリブーによる分析を確認すると、必ずしも全ての中庭が隣接する西側区画と正方形を造る訳ではないことが見て取れる²⁵。

これらの中庭に関する研究においても議論は主要な宮殿に絞られている。また、その他の庭でも比率についての分析は確認されていない。庭についての分析としてはヴァンステインハイゼ(Vansteenhuyse)がその規模と建造物の属性を基にして類型化したもののみであり、その比率については触れられていない²⁶。宮殿的構造の一つと考えられる中庭に関する議論をその他の建造物に拡張することで宮殿と非宮殿建造物の比較という本稿の目的が果たせる。

これらを踏まえた上で本稿では、宮殿的構造とされながらも未だ統合的研究が成されていない中庭の分析を行う。そして繰り返しになるが、その結果を通じて宮殿と非宮殿建造物間の差異が確認されるかを検討する事を本稿の目的とする。

中庭の長短比

本節では分析の説明と解説を行っていく。今回、中庭の比率について二つの分析を行った。一つは中庭と他の庭の間に比率の差異が存在するか否かの確認を行ったものであり(以下、「分析①」と記す)、もう一つは中庭間で比率の比較を行った際にどのような差異が現れるかを検証したもの(以下「分析②」と記す)である。共に、庭の短辺を 1 として長辺の数値を割り出す手法をとっている。分析対象とする遺跡の位置関係については図 2 の通りである。

庭のデータとして我々は先述のヴァンステインハイゼが集成した豊富な資料を用いる事ができる。ただしこれに際して我々は注意を払わなければならない事がある。一つ目の注意事項は、全ての庭が必ずしも方形であるとは限らない点にある。例えば、クノッソスやフェストス、マリアの西庭などはこれら宮殿の西側ファサードに面して造られる為、このファサードと面する辺は直線状にならない。また調査の限界によって庭の端部が明らかにならない事例も幾つか存在する。この点に留意する為に、本稿では原則方形を守り、ある程度庭の全体像が明らかになっているものを分析対象として選定している²⁷。もう一つがデータ自体の信用度である。このデータには一部ヴァンステインハイゼの推測によるものや、時には誤りともとれるものもあり、手放しにこのデータを使用する事ができるとは言い難い²⁸。今回の分析では、基本的にこれら

のデータを拠り所としているが、参照元も含めた報告書、他論文と比較した際に明らかに誤りがあると考えられるものは、報告書等のデータを採用するか、或いは参考文献の図表から自ら算出した²⁹。

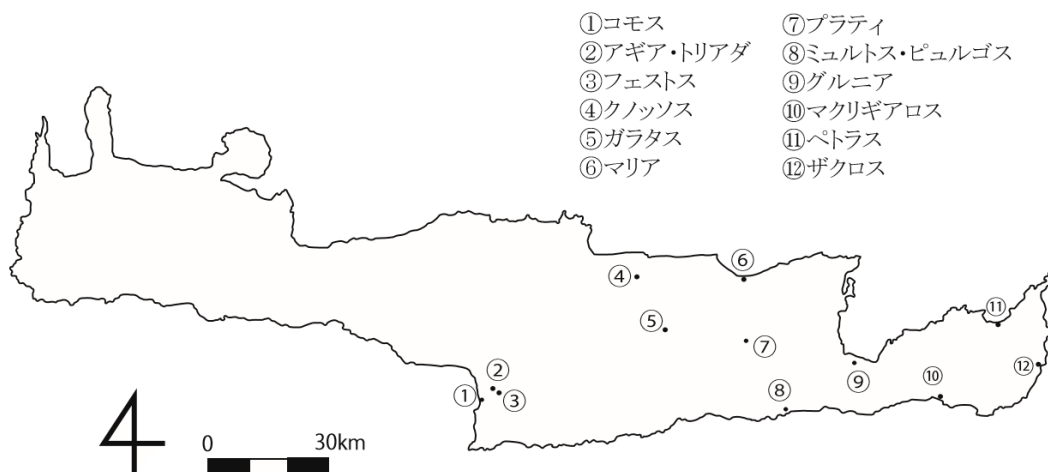


図2 本稿で取り扱う遺跡の分布図。

分析①

宮殿と非宮殿建造物間の中庭の比較検討の前に、中庭自体のデータがある程度の纏まりを持つものである事を証明しなくてはならない。分析①はその証明の為にを行ったものである。この分析では方形を保ち、全体像がある程度明らかになっている庭の長短比率を比較した。分析の結果は以下の表に纏めている。

遺跡名	庭	時期(庭の存在が確認される段階)	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	長短比率(1:x)
Zakros	north east court	MM I-LM IB	14	13.5	189	1.04
Phaistos	east court	MM I / MM II-LM IB	18	17	306	1.06
Malia	north court	EM III-LM IA, re-use in LM II	9	7.5	67.5	1.2
Myrtos Pyrgos	south court	(MM III?) LM I-LM IB	8.89	7.4	65.786	1.2
Malia	Agora	EM III-MM IIIB-?	40	30	1200	1.33
Kommos	south court-J/T	LM I-LM IA(?) LM IB-LM IIIA	39.1	28.54	1115.914	1.37
Malia	north east court	MM IIIA(?) - LM IA	14	10	140	1.4
Agia Triada※	central court?	MM IB(?)MM IIIB-LM IB	62	40	2480	1.55
Malia	north west court	EM III-LM IA, re-use in LM II	15	9	135	1.67
Knossos	theatral area	MM IA-?	34	20	680	1.7
Malia	central court	EM II(?)EM III-LM IA	48	27	1296	1.78
Knossos	central court	EM III(?) MM IB-LM IIIA2	52	28	1456	1.86
Myrtos Pyrgos	central court	(MM III?) LM I-LM IB	15	7.5	112.5	2
Makryghialos	central court	LM I-LM IB	12.5	6	75	2.08
Petras	central court	MM IIA-LM IB	13	6	78	2.16
Phaistos	central court	MM I / MM II-LM IB	51	22.3	1137.3	2.29
Galatas	central court	MM IIIA-LM IA	37	16	592	2.31
Zakros	central court	MM I-LM IB	30.3	12.15	368.1	2.49
Gournia	town court	?	40	15	600	2.67
Plati※	central court	LM I-LM II	50	16	800	3.13
Agia Triada※	lower court	MM IB(?)MM IIIB-LM IB	45	12	540	3.75

表2: 庭の長短比率

表を見ると明らかなように、大半の中庭の比率は 1:2 あたりで集中する。逆にその他の庭で

1:2 に近い比率になる庭がほとんど確認されない事も興味深い点である。ここで注目すべき点としてマリアの庭について確認をしたい。

マリアの宮殿には中庭の他に宮殿内部に造られている庭が二例確認される。それが北庭と北西の庭である。しかし両者の比率は 1:2 には決して近くない。この事は中庭とその他の庭の設計に明らかな意識の差異があった事を示唆している。なぜなら建造物のファサードに合わせて造られたであろう外部の庭とは異なり、建造物内部に造られる庭は設計する段階でその形が想定されていたはずであり、ある程度設計者が自由に比率を操作できたはずだからである。その上で中庭と同じ比率が選択されなかったという事は、1:2 の比率は使用されるシーンが限定されていたのではないだろうか。

配置される場所に関係なく方形を維持する庭の比率を一律に確認した事で中庭とその他の庭との比率の差異を明確に提示できたものと思われる。

分析②

続いて、中庭内の長短比率の比較検討を行う。この分析では先ほどのデータからもう一步踏み込んだ検討を行った。先行研究で中庭の長短比率が 1:2 で収まると確認されたことや、その理由まで考察を行ったプレジオンやパリブーの研究を踏まえた上で、1:2 を基準値に設定し、そこからの誤差で比較検討を行った。以下の表は分析結果をまとめたものである。

遺跡名	建造物	時期(庭の存在が確認される段階)	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	長短比率(1:x)	誤差
Makryghialos	Country House	LM I-LM IB	12.5	6	75	2.08	0.08
Knossos	Palace	EM III(?) MM IB-LM IIIA2	52	28	1456	1.86	0.14
Petras	Palace?	MM IIA-LM IB	13	6	78	2.16	0.16
Malia	Palace	EM II(?)EM III-LM IA	48	27	1296	1.78	0.22
Phaistos	Palace	MM I /MM II-LM IB	51	22.3	1137.3	2.29	0.29
Galatas Pediados	Palace	MM IIIA-LM IA	37	16	592	2.31	0.31
Agia Triada※	Villa	MM IB(?)MM IIIB-LM IB	62	40	2480	1.55	0.45
Zakros	Palace	MM I-LM IB	30.3	12.15	368.1	2.49	0.49
Plati※	Country House	LM I-LM II	50	16	800	3.13	1.13

表3：中庭を持つ建造物の遺跡データ

誤差の平均値は 0.34、中央値はフェストスの 0.29 となった。以下では中央値以下の誤差を小さな誤差とみなし、これを超える誤差を大きな誤差とみなしたうえで詳細を記す。

中庭の比率誤差が中央値以内に留まっているものはクノッソス、フェストス、マリアといった大規模かつ早期の段階から造営されていた建造物の中庭と、中期ミノアに造営されたペトラスの建造物の中庭、そしてマクリギアロスといった小規模かつ後代に造営された建造物の中庭である。マクリギアロス、ペトラスの建造物では大規模な建造物よりも更に高い精度で比率を保っている。

マクリギアロスの建造物は新宮殿時代に造られた。本稿で比較している建造物の中では特に小規模な建造物の一つであるが、巨石を用いた西側ファサードや中庭から宮殿を模倣した造り

であると考えられる。また女性像の出土や中庭に残る祭壇やベンチといった構造から、儀礼行為との関係性の強さが伺える遺跡でもある。印章が確認されている点も建造物の重要性に大きく関わる³⁰。中庭の長短比率は 1:2.08 であり、全ての中庭で最も 1:2 の比率に近い。

ペトラスもマクリギアロスと同規模の建造物だが、両者の間には幾つか重要な差異が確認される。一つ目は建造時期である。ペトラスはマクリギアロスと異なり古宮殿時代から建造物の存在が確認できる³¹。二つ目は地域との関係性である。アギア・フォティアやカマイジといった周辺遺跡との関係性、島内の比較的孤立した地域に造営されたという選地的観点などから地域的な重要性が注目される³²。また貯蔵庫や粘土板文書のといった宮殿的諸要素も相まって宮殿的性格を高めてると言えよう³³。ペトラスの中庭のサイズは古宮殿期から LMIA の段階では 6m×13m で比率としては 1:2.16 である。しかし LMIB 期に入ると中庭内に更に壁が追加され、中庭が 4.9m×12m に縮小している事に注意しなくてはならない³⁴。

主要な宮殿はいずれも同程度の規模、中庭の比率を保持している。この中で最も誤差が大きいものはマリアである。またマリアの宮殿は三者の中で最古のものである。この地域では、他の地域ならば新宮殿期から確認されるような洗練された建造物の諸要素を早い段階で取り入れている。特に、宮殿周辺の建造物からこれらの諸要素が確認されている事には注目すべきだろう。しかし年代と誤差との関連性は現状では推測の域を超えない³⁵。

中庭の誤差が大きく出た例としてはガラタス、アギア・トリアダ、ザクロス、プラティを挙げられる。ガラタスを除けば、全て古宮殿時代以前に造営された中庭である。

中でも注目すべき例はザクロスのものである。ザクロスの宮殿は主要な三宮殿に続き早い段階から造営された。さらに、土器様式の研究からはザクロスとクノッソスの文化的関係性も考察されている³⁶。しかしザクロスの中庭の誤差は極めて大きい。この誤差は宮殿と称される建造物の中で最大である。またザクロスは建造物の軸も他の宮殿と比較して大きくずれる事が確認されている事も付言しておく³⁷。主要な宮殿と考えられていたザクロスの中庭においてこのような大きな誤差が発生したことは、建造物の規模や重要性が必ずしも設計精度に関わらないことを示しているのではないか。

もう一つ、プラティについて簡潔に述べておきたい。プラティとアギア・トリアダの庭は中庭と呼称されるものの庭の全体像があまり明らかになっていない。特にプラティは 20 世紀初頭に調査が行われた後に埋め戻されている遺跡であり、調査自体も北東区画が未発掘である。プラティの中庭の長辺は発掘された南東区画の壁面の端までをその数値として換算される。今回取り扱ったデータもこれに則った為、一つだけ突出した印象を与えている。しかし本当にここまでが庭だったのだろうか。実は壁の最東端の 16m ほど手前に北へ向かう壁面の一部が発見されている。もしもここで庭が途切れるとすれば、庭のサイズは 16m×31.25m となり中庭の比率は 1:1.95 となるのだ。これは逆説的であり、やや冒険的な推測ではあるが、1:2 の中庭長短

比を考慮すると、実際のプラティの長辺はこの箇所が端なのではないかと考えることができるのである³⁸。

全体を通して誤差と他要素に相関性を見て取る事は可能だろうか。初めに規模との関係性を確認する。規模と誤差の関係性では三つのグループを確認することが出来る。一つ目は比較的大規模かつ誤差の小さなグループ（クノッソス、フェストス、マリア）、そして二つ目は比較的小規模かつ誤差の小さなグループ（マクリギアロス、ペトラス）である。後者の方が、誤差が小さく収まるが、これは建造規模と設計精度維持の難易度の比例関係がある程度考えられる。しかし必ずしもこの規則が当てはまらない事例が存在する。それが三つ目のグループである。ザクロスやガラタスの中庭をこれとして捉える事が出来る。規模の観点で見れば、このグループは一つ目のグループと二つ目のグループの間に位置するものの、誤差は両者に比べて大きく出ている。

年代に関しても、ガラタスやザクロスは例外的な立ち位置に現れる。新宮殿期に造営されているマクリギアロスは共に誤差が小さいものの、ガラタスの誤差は 0.3 を超えている。時代を経て技術が進歩していくという捉え方はやや危険と考えられる。

最後に宮殿と非宮殿で明らかな差異は出るだろうか。表 3 では誤差の順に遺跡を並べているが、最も誤差が低いものは宮殿ではないマクリギアロスの中庭であり、フェストス、クノッソスに続くのは宮殿か否かグレーゾーンとみなされるペトラスである。逆に未確定のプラティを除けば最も誤差が出ているのは宮殿と評価されるザクロスの中庭であり、中庭の誤差は宮殿、非宮殿建造物を問わずに並んでいることが確認できる。このことから、中庭の設計規格の精度は宮殿、非宮殿に関係なく、逆に設計規格によって両者を区分するような意図は見当たらないと言える。

考察

前節で行った分析において、①中庭は他の庭には現れない長短比率の纏まりを持つ事、②中庭の比率誤差は宮殿か否かに左右されている訳ではないという事を明らかにした。宮殿とみなされない建造物でも、従来の研究で宮殿と確認されているものと似た長短比率が守られていることから、従来の研究で行われていた建造物の区分とは関係なく、中庭の造営において一定の共通した規則が存在した可能性を指摘できる。つまり、宮殿と非宮殿という区分は当該期においてはそこまで強く認識されていなかったのではないだろうか。

しかし、この結論は今回分析を行った諸建造物が全く同じ種類の建造物として当該期の人々に認知されていたという意味ではない事は強く主張しておきたい。これまでの研究で確認されてきたように、規模や宮殿的構造の揃い具合等においてミノア建造物間に差異がある事は厳然

たる事実である。それでは、なぜ同じ構造を持つ建造物間においてこのようなヴァリエーションが発生するのだろうか。そもそも、中庭があるという共通点のみで同一の建造物であるということが出来るのだろうか。我々はどのようにこれらの建造物を捉えられるべきだろうか。

これらの問題を考える上で *Daidalos at Work* の中で語られるパリプーの言説は我々に重要な示唆を与えてくれる。

ミノア宮殿は単一の建造物ではなく、都市グループデザインの過程の結果である事を適切に強調したうえで…³⁹

従来、宮殿とは幾つかの諸要素が一つのセットで揃う建物として認識されていたと考えられてきた。そしてこれは我々後代の研究者達自身が「宮殿」という用語をそのように認識してきたことに大きく由来する。しかしそのような単一の建造物ではなく、都市形成のプロセスが生み出した形が「宮殿」と呼称されてきた建物だったと考えられないだろうか。

つまり、中庭という構造は都市形成の過程で、その地域における儀礼行為の必要性が認識された結果造られる一構造であったのではないか。そしてもしも、その他の宮殿的な建築構造も中庭と同じように宮殿に備わらなければならない一連の構造ではなく独立した構造物だとすれば、ミノア建造物はその建造物に必要とされた構造をレイヤーのように重ねてあわせた結果完成したものだったのではないだろうか。即ち、クノッソスで確認される巨大な宮殿も、マクリギアロスの建造物も、少なくとも中庭で行われる儀礼的な機能の側面では、規模の差こそあるものの、機能的に同質の存在であったと考えるべきであろう。

宮殿、そして宮殿的構造を持つ諸建造物とは何か。これまで宮殿とみなされてきた建造物、或いは宮殿には満たないとされてきた建造物は本質的には相違ない。いずれもその地域に即した社会的機能を期待された一定の建造物群であり、我々が見ているのはその多様なヴァリエーションなのである。

おわりに

本稿では中庭という宮殿的構造を中心に宮殿と非宮殿の関係性に探る事を試みた。分析を通して両者に共通する中庭という構造は同様の規格で造られた同性質のものであり、両者の間には決して差異が存在しないという事を確認することができた。即ち、少なくとも中庭に関しては宮殿と非宮殿建造物との区別意識が存在していなかったのである。

本稿の分析では中庭の長短比率だけの検討となってしまうている。庭の長軸の方位、或いは敷石や中庭を囲む壁面の構造や技法等、今回の分析以外にも様々な要素の確認が必要であることは間違いなく、今後の課題としたい。また宮殿定義に関する箇所でも触れたが、宮殿的構造

と認識される構造は中庭だけでは無い。これらにおいても各建造物間でどのような差異が現れるか検討していく必要がある。中庭を持つ建造物における儀礼的機能の同質性を検討する為には景観的視点から建造物の選地動向を比較することも必要である。これらについても引き続き検討していく。

注

¹ ミノア文明を含むギリシア青銅器時代に関する概説書としては(Cline, ed. 2010)を参照されたい。

² (Evans, 1921- 1935).

³ 宮殿機能に関する諸検討については(Hägg and Marinatos. eds., 1987) を参照されたい。

⁴ (Schoep, 2010) 113.

⁵ (Warren, 1985) 94 では、当時確認されていた宮殿であるクノッソス、フェストス、マリア、ザクロスの共通点としてこれらの諸構造を提示している。彼はその他に、行政に用いられる粘土板文書の存在や周辺地域における主要建造物として宮殿を評価している。

⁶ (Palyvou, 2002) 167.

⁷ (Graham, 1962) 73; (McEnroe, 2010) 84- 85; (Palyvou, 2018) 199- 200. 特に近年のミノア建造物に関する概説書としては(McEnroe, 2010)が詳細に記されている。

⁸ (Day and Wilson, 1998); (Nakassis. et al., 2010) 245; (Schoep, 2002).

⁹ これらの例として(McEnroe, 2010)では中庭などを持つが小規模のペトラスの宮殿や、研究早期から調査されており多くの宮殿的要素を持ちながらも切石による洗練された構造を持たないグルニアの建造物などを挙げている。詳細は(McEnroe, 2010) 89- 92 を参照されたい。

¹⁰ (Evans, 1921- 1935).

¹¹ (Driessen, 2002) 6.

¹² (Warren, 1985) 94; (McEnroe, 2010) 54, 89; (Schoep, 2010) 115.

¹³ (Schoep, 2002).

¹⁴ (Day and Wilson, 1998).

¹⁵ (Driessen, 2002); (Tsipopoulou, 2002) 133. これらの論文は共に(Driessen et al., eds. 2002)に掲載されている論文である。ミノア文明における宮殿と統治者に関連する議論はこの論文集が詳しい為、詳細はこれを参照されたい。

¹⁶ (McEnroe, 2010) 54, 89.

¹⁷ 例として megastructure (Preziosi, 1983), court compound(Driessen, 2002), elite minoan architecture (Shaw, 2015)といった名称を挙げることが出来る。

¹⁸ (Palyvou, 2018).

¹⁹ (Shaw, 2015); (Palyvou, 2018).

²⁰ (Driessen, 2002) 4.

²¹ (Driessen, 2002) 8- 10.

²² (Graham, 1962).

²³ (Preziosi, 1983).

²⁴ (McEnroe, 1984).

²⁵ (Palyvou, 2002) LVI.

²⁶ (Vansteenhuyse, 2002).

²⁷ ただし、中庭である可能性を持つアギア・トリアダとプラティの庭については記載している。

²⁸ 本稿で参照したヴァンステインハイゼのデータにおいて確認される幾つかの誤りをここに記したい。まずミュルトス・ピュルゴスの庭についてである。彼のデータではミュルトス・ピュルゴスの庭は 15.0m×7.5m の中庭として記載されているが、彼が引用する(Myers et al., 1992) 202- 209.の図面や解説、また(Cadogan, 1977) 78.の図面を見る限りこの遺跡で確認できる庭は 8.89m×7.4m の南庭とみなされるほかないだろう。これは誤差と捉えるには難しい誤りであり、何か別のデータと混同されているか或いは誤表記ではないかと疑われる。フェストスの中庭の長辺については 46.5m と表記されていたが、これも確認したところ 51m と見る方が適切であろう。またマリアの北庭についても大きな誤解が確認される。ヴァンステインハイゼは北庭のサイズについて 12.0m×15.0m と記しているが、これは北庭を囲うポーチの部分まで庭の範囲として測定してしまっている。彼も参照している(Myers et al., 1992) 181.の航空写真を確認すれば明らかなように、このポーチの敷石と北庭の敷石には床面に段差が存在しており、両者が区別されている事が理解できる。従ってポーチ部分は庭の範囲として入れるべきではなく、このデータは不適切である。また少し細かすぎるかもしれないが、クノッソスの中庭及び西庭のデータ引用元が誤植によってプラティの引用元になっている。これらの誤りはデータやそれに基づく研究の信頼度を著しく損なわせるものであり、本来あってはならない過ちである。

²⁹ 本稿において分析に用いた遺跡の情報は(Vansteenhuyse, 2002) 248 を基にしつつ、以下の文献を参考にした。

- ・ Agia Triada... (Myers et al., 1992) 70- 77.
- ・ Galatas... (Rethemiotakis, 2002).
- ・ Gournia...(Hawes, 1908)
- ・ Knossos...(Hood and Taylor, 1981); (Myers et al., 1992) 124- 147.
- ・ Kommos...(Shaw and Shaw, 2006) 958.
- ・ Makryghialos...(Driessen and Macdonald, 1997) 220- 221; (Myers et al., 1992) 172- 174.
- ・ Malia...(French, 1992-1993) 74- 75; (Myers et al., 1992) 175- 185.
- ・ Myrtos Pyrgos...(Cadogan, 1977) 78.

- Petras... (Blackman, 1998- 1999) 121- 122; (McEnroe, 2010) 91; (Tsipopoulou, 1999b) CLXXXIX; CXC.
- Phaistos... (Myers et al., 1992) 232- 243; (Pernier, 1935).
- Plati...(Dawkins, 1913- 1914).
- Zakros... (Myers et al., 1992) 292- 301;(Platon, 1974); (Platon, 1985).
- ³⁰ (Myers et al., 1992) 172- 174; (Driessen and Macdonald, 1997) 220- 221.
- ³¹ (Tsipopoulou, 1999b).
- ³² (Tsipopoulou, 1999a).
- ³³ (Tsipopoulou, 2002).
- ³⁴ (McEnroe, 2010); (Tsipopoulou, 1999b).
- ³⁵ (Driessen, 2010).
- ³⁶ (Platon, 2002); (Platon, 2004); (Platon, 2010).
- ³⁷ (Shaw, 2015) 22- 25.
- ³⁸ (Dawkins, 1913- 1914)
- ³⁹ «Having emphasized cogently that the Minoan Palace is not a single building but the result of an urban group-design process ...», (Palyvou, 2018) 192.

参考文献

- Blackman, D. 1998- 99. "Archaeology in Greece 1998-99." in *Archaeological Reports* 45: 1- 124; 192.
- Boyd, H. H. et al., 1908. *Gournia, Vasiliki and Other Prehistoric Sites on the Isthmus of Hierapetra, Crete*. Philadelphia.
- Cline, E. H. ed. 2010. *The Oxford Handbook of The Bronze Age Aegean (ca. 3000- 1000 BC)*. Oxford.
- Cadogan, G. 1977. "Pyrgos, Crete, 1970- 7." in *Archaeological Reports* 24: 70- 84.
- Day, P. M., and D. E. Wilson. 1998. "Consuming Power: Kamares Ware in Proto-palatial Knossos." in *Antiquity* 72: 350- 358.
- Driessen, J. 2002, "'The King Must Die.' Some Observations on the Use of Minoan Court Compounds." in Driessen et al., eds. 2002: 1- 13.
- Driessen, J. 2010. "Malia." in Cline ed. 2010: 556- 570.
- Driessen, J., and C. F. Macdonald. 1997. *The Troubled Island: Minoan Crete before and after the Santorini Eruption (Aegaeum 17)*. Liège.
- Driessen, J. et al., eds. 2002. *Monuments of Minos: Rethinking the Minoan Palaces. Proceedings of the International Workshop "Crete of the Hundred Palaces?" Université Catholique de Louvain-la-Neuve, 14- 15 December 2001 (Aegaeum 23)*. Liège.
- Evans, A. J. 1921- 1935. *The Palace of Minos at Knossos I- IV*. London.

- French, E. B. 1992-1993. "Archaeology in Greece 1992-93." in *Archaeological Reports* 39: 3- 81.
- Graham, J. W. 1962. *The Palaces of Crete*. Princeton.
- Hägg, R., and N. Marinatos. eds. 1987. *The Function of the Minoan Palaces. Proceedings of the Fourth International Symposium at the Swedish Institute in Athens, June 10-16, 1984. Skrifter utgivna av Svenska Institute in Athens, June i Athen 4/35*. Stockholm: Åström.
- Manning, S. W. 2010. "Chronology and Terminology." in Cline ed. 2010: 11- 28.
- McEnroe, J. C. 2010. *Architecture of Minoan Crete: Constructing Identity in the Aegean Bronze Age*. Austin.
- Myers, J. W. et al. 1992. *The Aerial Atlas of Ancient Crete*. Berkeley.
- Nakassis, D., M. L. Galaty, and W. A. Parkinson. 2010. "State and Society." in *The Bronze Age Aegean*: 239-250.
- Palyvou, C. 2002. "Central Courts: The Supremacy of the Void." in Driessen et al., eds. 2002: 167- 177.
- Palyvou, C. 2018. *Daidalos at Work: A Phenomenological Approach to the Study of Minoan Architecture*. Pennsylvania.
- Pernier, L. 1935. *Il palazzo minoico di Festòs I*. Rome.
- Platon, L. 2002. "The Political and Cultural Influence of the Zakros Palace on Nearby Sites and in a Wider Context." in Driessen et al., eds. 2002: 145- 156.
- Platon, L. 2004. "Το Υστεομινωικό Ανάκτορο της Ζάκρου: Μία "Κνωσός" έξο από την Κνωσό." in *British School at Athens Studies* 12, *KNOSSOS: PALACE, CITY, STATE*: 75- 82.
- Platon, N. 1974. *Ζάκρος Τό νέον μινωικόν ανάκτορον*. Athens.
- Platon, N. 1985. *Zakros: the discovery of a lost palace of ancient Crete*. New York.
- Preziosi, D. 1983. *Minoan architectural design: formation and signification*. Berlin.
- Rethemiotakis, G. 2002. "Evidence on Social and Economic Changes at Galatas Pediada in the New-Palace Period." in Driessen et al., eds. 2002: 55- 68.
- Schoep, I. 2002. "The State of the Minoan Palaces or the Minoan Palace-State?." in Driessen et al., eds. 2002: 15-33.
- Schoep, I. 2010. "Crete." in Cline ed. 2010: 113- 125.
- Shaw, J. W. 2015. *Elite Minoan Architecture: Its Development at Knossos, Phaistos, and Malia*. Pennsylvania.
- Shaw, J. W. and M. C. Shaw. eds. 2006. *Kommos V: The monumental Minoan buildings at Kommos*. Princeton.
- Soles, J. S. 2002. "A Central Court at Gournia." in Driessen et al., eds. 2002: 123- 132.
- Tsipopoulou, M. 1999a. "From Local Center to Palace: The Role of Fortification in the Economic Transformation of the Siteia Bay Area, East Crete." in *POLEMOS: La contexte guerrier in égée*

- à l'Age du Bronze* (Aegaeum 19), ed. R. Laffineur, 179- 190. Liège.
- Tsipopoulou, M. 1999b. "Before, During and After: The Architectural Phases of the Palatial Building at Petras, Siteia." in *MELETEMATA: Studies in Aegean Archaeology Presented to Malcolm H. Wiener as He Enters His 65th Year* (Aegaeum 20), ed. P. Betancourt, V. Karageorghis, R. Laffineur, and W. D. Niemeier, 847- 855. Liège.
- Tsipopoulou, M. 2002. "Petras, Siteia: The Palace, the Town, the Hinterland and the Protopalatial Background." in Driessen et al., eds. 2002: 133- 144.
- Vansteenhuyse, K. 2002. "Minoan Courts and Ritual Competition." in Driessen et al., eds. 2002: 236-248.
- Warren, P. M. 1985. "Minoan Palaces." *Scientific American* 253:94-103.
- 周藤芳幸, 澤田典子. 2004. 『古代ギリシア遺跡辞典』東京堂出版.